

## 第2回環境研究機関連絡会成果発表会

### —持続可能な社会をめざして—

独立行政法人国立環境研究所  
理事長 合志 陽一

平成13年10月に環境研究機関連絡会が創設されてから、3年が経過しました。この連絡会は、1) 環境研究の推進状況の紹介と相互理解、2) 環境研究の主要成果の紹介、及び3) 環境研究及びこれに関連する事項の協力・推進・連絡を目的としております。今回(第2回)の発表会—持続可能な社会をめざして—は、その目的に添って企画されました。

環境研究は、その重要性について誰も異議を唱えるものではありません。しかし為すべき研究課題は多く、研究の体制が伴わないのが現状であります。散在した研究機関でそれぞれの研究者が日夜研究を進めているものの、連絡は十分ではありません。環境問題の大きさ、複雑さを考えれば、それを研究する体制も単純ではなく、問題にふさわしい取り組みが要求されましょう。世の常として、体制が整うのは関係者の先行する目に見えない努力が必要です。環境研究のあらゆる側面を検討しながら方向を見出し、実行していかなければなりません。それには先ず研究者・研究機関の交流と連携が第一歩との認識が、本連絡会の出発でありました。しかし交流はスターティングポイントであり、それに活動が留まるべきではないでありましょう。環境研究に携わるものとして、あとう限りの知恵を結集し、環境研究の方向付けと体制作りを考えていくことも、長期の目標として意義あることでありましょう。

環境研究は現実の問題の解明・解決が目的でありますから、基礎研究とは著しく様相が異なり、多面的・多様なアプローチが要求されます。このような分野の研究では次の三つの視点が重要に思われます。1) 見逃さない、2) 放置しない、3) 慌てない。

見逃さない：この視点の重要性は十分に認識されていますが、現実には見逃されていた残念な事例は多いのです。水俣病において周辺の動植物に異常が認められたのは、最初の患者が発生した時期に先立つこと約7年であったといわれます。動植物の異常が人間への影響と直接結びつくわけではありませんが、しかし人間への影響があるのではないかと検討を開始するか、少なくとも観察を始めることができれば、問題の解明ははるかに短縮できたのではないかと考えられます。見逃さない・・・は、異常だけではありません。基礎研究での新しい知見が報告されたとき、あるいは新しい技術が開発されたとき、これが環境問題としてどのような可能性があるかを注意深く検討することは重要でありましょう。最近ナノサイエンス、ナノテクノロジーは新しい大きな分野を創りつつありますが、環境問題として何があるかは、まだ手が付けられたばかりです。脳科学の最近の進歩も著しいのですが、それを環境問題の課題として考え直すことも重要でありましょう。問題は、このような段階での研究に対して、とりわけ競争的資金による研究費の獲得が難しいことであります。問題がはっきりしている場合は研究費を割

り当てやすいのですが、問題かどうか分からないことには、容易ではありません。

放置しない：問題が、あるいは研究すべき課題があっても、それに取り組んだり研究を進められないことが多々あります。現実の環境問題では因果関係の立証が難しく、時間が経過し被害が拡大することがよくあるのです。水俣病での不幸な経験は、それを示しています。それを反省しての対応は徐々に取られるようになりつつあります。しかしながら様々の新たな問題が提起されています。環境問題ではありませんが、救急体制での心肺蘇生など、法によって認められていなかったために失われた人命は、決して少なくはありません。最近改められはしていますが、このような事態の放置は、極言すれば見えざる殺傷行為ともいえましょう。環境問題においても程度こそ違え、同様の問題はあり得ます。このような問題への対処は、困難は多くとも適切なスキームが作られるべきで、多面的なアプローチが不可欠でありましょう。また温暖化のような地球環境問題は、原因と結果の時間の遅れが大きく、予見的に行動しなければ手遅れになりますので、放置は禁物であります。

放置しないことの難しさは単純ではありません。意見が対立し主張が通じない場合の難しさとは別に、何の理解も得られず、時間のみ経過することが現実には多くあります。無理解に耐えながら重要なことと信じて研究を提案し続けることは、大変強い精神力を要します。これも容易ならざる事ですが、環境問題の研究者には是非乗り越えて欲しい関門です。

慌てない：正確な判断に基づいて行動すべきなのは当然であります。しかしそれは容易ではありません。不正確な情報に基づく性急な判断は問題を引き起こします。リスクアセスメントに基づく行動での影響ならばともかく、風評被害では耐え難いことです。しかし、研究分野ではもう少し別の問題があります。薬害サリドマイド事件は周知のことであり、発売を許可しなかったケルシー女史の鋭い判断は、米国に於ける同種の薬害を未然に防いだものとしてよく知られています。前出の見逃さないという注意深さの典型であります。もう一つの面があります。サリドマイドは、適切な注意を持って扱えばいくつかの難病に著効を示すものです。一般の科学界はその研究を認めませんでした。ケルシー女史はそのような判断に反対し、条件付ながら使用すべしとしました。悪しき薬の典型として葬り去るのではなく、有効な場合には注意しつつ使うべきだとする判断でした。この冷静な判断は多くの難病患者に光明をもたらしたと言われています。

見逃さないこと、放置しないこと、慌てないことは、環境問題、環境研究において常に念頭に置きたいものです。環境研究者が現実の課題を抱えながら仕事を進めるとき、様々の壁にあたることがあります。同様の分野の研究者と交流し、意見を交換することは個人として新たな意欲を増し、さらにこの分野の新しい研究の方向を見出し、環境問題の解決に役立つことでありましょう。今回の集まりが、実りある発表会となりますことを期待致します。